

「何だ！この感覚は…」

客席に座った瞬間、今までに観たことのない富山の挑戦が始まるのかと思うと、ワクワクでも、ゾクゾクでもない、不思議な感情がざわついた。

その舞台こそ、3月7日(木)～10日(日)まで、オーバードホール舞台上 特設シアターにて、上演された タニノクロウ氏×オール富山の挑戦 「ダークマスターTOYAMA2019」である。

原作は、狩撫麻礼さんの短編漫画で、腕利きだが偏屈者の定食屋のマスターと、東京からやって来た若者を巡る物語。タニノ氏主宰とする「庭劇ペニノ」の代表作である。今回は、舞台を富山に移し、タニノ氏が脚本を大幅に書き換えた。台詞が富山弁というところにも、タニノ氏の富山愛を感じる。

イヤホンから、聞こえてくるマスター(六渡氏)と青年(善雄氏)との富山弁の掛け合いは、吉本喜劇のように、おもしろ可笑しく、観客の笑い声を誘った。

ザ・富山弁でレシピを教わる青年の焦りや、調理する楽しさを疑似体験するように、どんどん舞台に引き込まれていく。

ステーキを焼く場面では、油の弾ける音が響き、炎が立ちあがり、香ばしい匂いまで立ち込める。更に、映像の演出も重なって、視覚・聴覚・嗅覚・・・まさに、五感を刺激する演出に、「まいったちゃ〜」という感じである。

キャストは、富山在住・出身者によるオーディションにより決定。濃い役者たち…。実は、知り合いも多く、フラットな気持ちで観れるのかと不安があったのだが、全力で演じる役者たちにのめり込み、富山を愛するからこそその演技に魅了された。

美術スタッフも一般公募だというから目からウロコである。舞台美術家 稲田美智子氏の指導の下とはいえ、ものすごいチャレンジだと思う。4ヵ月かけて完成した、美術スタッフの汗と涙の結晶とも言える「定食屋」は、昭和レトロな懐かしさを感じさせ、細部までリアルだ。近くでじっくり見たいという衝動にもかられ、路地裏までも想像させた。そして、美術スタッフの富山愛を感じずにはいられない。

タニノクロウ氏は、大きく変わっていく街を眺めあらゆる思いを、脚本に込めたと語る。

時代は、生まれ変わっても、守らなくてはならないもの、受け継いでほしいもの、誰にでもある大切なもの……

そんなことを、改めて気付かせてくれるような、愛のこもった、富山愛を込めた作品ではなかろうか。

観客もまた、富山 Love なのである。

タニノクロウ氏×オール富山の挑戦は、  
新感覚で贅沢な舞台だったと、立山ライスを食べながら思った観客も少なくないであろう。

中野 ひとみ      (富山県富山市)